

二〇〇六年には総選挙が予定されていたが、BNPとアワミ連盟は選挙日時や候補者の問題などで、互いに自己の政党に有利な条件を求めて衝突し、選挙が事実上不可能な状態となり、軍が出動し臨時政府が組織された。三年後の二〇〇九年にやっと総選挙が行われてアワミ連盟が勝利し、この時より現在に至るまで、二期連続でシェイク・ハシナが首相を務めている。

二〇一四年の総選挙では、「デジタル・バングラデシュ」というスローガンのもと、アワミ連盟を筆頭としてジャティオ党、共産党ほか複数の政党を含む連立政権が成立し現在に至る。

シェイク・ハシナ政権の経済政策により順調な経済発展を続け、二〇一四年には高度成長期に入り、現在は後発開発途上国からの卒業を目前にしている。独立から今日に至るまで、バングラデシュは日本のODAやNGO・NPO法人などからの無償・有償の資金提供や、さまざまな方面での技術協力を通じて、現在も多大なる支援を受け続けている。また、日本企業からの投資も含めて、日本のバングラデシュに対する貢献に対して、一人のバングラデシュ国民として深く感謝していることを皆様にお伝えして、本書の結びとしたい。



## 特別対談 ペマ・ギャルボ×シャーカー

## バングラデシュ独立とチベット人

シャーカー…一九七一年にバングラデシュは独立しましたが、ペマ先生は、その時はまだ大学生でしたか？

ペマ・ギャルポ（以下ペマ）…亞細亞大学の学生です。一九七〇年頃、バングラデシュでサイクロンの大災害（注：一九七〇年一一月一二日、最大級のサイクロンと高潮が当時の東パキスタンを襲い、数十万の死者が出た）が起きたことを報道で知つて、街頭で寄付を募り、バングラデシュ（東パキスタン）への支援を訴えたのが、私とバングラデシュとの関係の始まりでしたね。しかし、当時はせっかく集まつた寄付金を、そのままパキスタン大使館に持つていつてしまつた。

シャーカー…それは当時としてはしようがないでしょう。まだバングラデシュは独立していなかつたですからね。

ペマ…独立運動が始まつてからは、日本のインド大使館の図書館が、独立運動の亡命者の事実上の臨時事務所にもなつていたんです。そして、当時のアジア文化会館という、東

洋文庫の近くにも寮があつて、そこにも一人くらいバングラデシュの学生が住んでいたかな。

私はチベット人として、この独立運動には最初の段階から関心がありました。まず、バングラデシュの独立義勇軍の多くがインドで軍事訓練を受けていて、その責任者がジエネラル・ウパンというインド軍の将軍でした。彼は私のよく知つている人でもあつたし、インドにいるチベット人部隊が、多くこの独立戦争に参加していたのも知つていました。実際この独立戦争にはチベット人部隊がかなりゲリラ戦を含めて参加していく、多くの死者や負傷者を出しています。

シャーカー…バングラデシュ独立にはチベット人の力も大きかつたのですね。でも、本格的に支援したのはインドだった。

ペマ…それはもちろん、インディラ・ガンディー首相の方針。ガンディー首相は当時、中国、パキスタン、そして国内の共産革命勢力、アメリカの支持するインテリ知識人など、四方八方を敵対勢力に囲まれていました。その中で、まず、バングラデシュを独立させ、パキスタンの力を弱めること、これがガンディー首相の政治目的でした。しかも、それ

はバングラデシュ人たちの待ち望んでいたことでもありました。

ただ、確かバングラデシュは建国当時、国名に「ソーシャリスト（社会主義）」という単語が入っていましたよね。国名というものは、その中に国の目指すべき理想や目標が基本的にはすべて入るものなのです。その意味では、バングラデシュ独立の理念は、まずバングラデシュをイスラム国家ではなく、インド同様の、宗教と政治を分離した世俗国家にするために、イスラムという単語は国名に入れなかつた。しかし、「社会主義」は入つていた。

当時の日本は、実は各国に先駆けてバングラデシュを承認しました。これは早川崇先生（元日本バングラデシュ協会会長）、長谷川峻先生といった人たちの功績です。同時に、自由民主主義の日本がいち早く動かなければ、バングラデシュは社会主義国として、當時でいう「東側」に行つてしまいかねなかつた。これは戦後の日本外交として、実は特筆すべき成功例の一つだと思いますよ。そして大使館が青山にできました。

シャーカー・イスラムの国ではないことを示す象徴として、最初の大使はヒンドゥー教の方だつたはずです。

ペマ…そうですね、そこは、バングラデシュが世俗国家であることを明確にした。そして、私はその青山の大使館の開会式にバングラデシュの旗が揚がって、国歌をみんなが歌うのを聴いたとき、本当に感動した。この人たちが祖国の独立を果たしたこと、そして、国を奪われたチベット人もその戦いに参加したことを思つて、いつの日か、チベットも同じように独立を果せるはずだと思いながら国歌を聞いていました。

シャーカー…しかし、一九七五年にムジブル・ラーマンが暗殺され、軍事政権が誕生したことによって、このバングラデシュ独立の歴史も意義も、国民の記憶から消し去られてしまつたんです。私たちはまだ、その時代のことを覚えてゐる。しかし、若い人々は、独立運動がどんなものだったのか、どれほどの犠牲を出して独立を勝ち取つたのかもほとんど知らない。そして、バングラデシュ独立を支援してくれた日本人の記憶も消えていつてしまつた。



## 日本によるバングラデシュ支援

ペマ…一九七四年くらいまでの間は、日本はかなりバングラデシュを支援し関係を作ろうとしているんです。

バングラデシュが独立して、最初に必要だったのは看護師でした。私の来日を支援してくださった埼玉医大の丸木清美先生が、二七名の女性を招いて教育に当たっていました。

日本政府も、アメリカの承認を待たずに、独自にバングラデシュを承認するなどの独自外交を行つた。これは、それまでの日本とバングラデシュの歴史的関係がやはり影響していたのだと思うし、バングラデシュ人も、日本に本当に感謝していました。でもその後、二回もクーデターが起きて、国を作つた指導者たちがほとんど殺されてしまった。

それで、私はもう関わりたくなくなってしまった。

独立運動の指導者、ムジブル・ラーマンが一九七五年に暗殺された後、彼のような優れた指導者はなかなか出てこなかつた。特に彼は雄弁家で、その演説の録音とかを聴くと、チャンドラ・ボースと同じで、言葉は充分にわからなくても心に響いてくるんです。

ムジブル・ラーマンの後は、そういうカリスマ的な指導者がいないし、イスラム教を国教として押し付ける傾向が出てきたりして、だんだん私はバングラデシュの問題から足が遠のいていきました。

シャーカー…確かに、独立当初の日本の貢献は大きかつたですね。当時のバングラデシュは食料も不足していたし、たくさんの女性がパキスタンの軍人からひどいレイプを受け、独立はできただけれど大変な状況だった。そこを日本がとても支援してくれて、国を立て直すのを手伝ってくれた。

ペマ…日本の宗教界もずいぶん支援したはずですよ。そして、バングラデシュ人もよくそれに応えた。勉強家だし、また芸術的な才能のある人もとても多かつた。

シャーカー…そして、バングラデシュ人も日本で勉強したいという人が多くて、ずいぶん留学生が来ました。特に中曾根総理が留学生を招いた時代、私も一九八四年に留学したんです。

一九七三年、ラーマン首相が来日した時はパーテイーが開かれ、そこで演説するのを直接聞きました。やはり、すごいオーラみたいなものを感じましたよ。その後、バンガラデシュから日本に医学生が留学し、外科や内科を東京や九州で学んで、それが後に日本・バングラデシュ友好病院の建設につながった。それを見ていて、もう一つバングラデシュ人の長所だと思ったのは、とてもチームワークがいいし、公共心をもち、同じ目的のためなら連帯してやっていく。正直、私たちチベット人は、俺が俺がと、みんなが上に立ちたがって、まとまって何か結果を出すために力を合わせるという面が足りない。それはむしろ、こちらが学ぶべき姿勢だと思いました。

シャーカー…あの独立運動も、ある意味チームワークで成功したんです。

ペマ…そして、先ほども言つたけれど芸術のセンスがあつて、みんなが詩を書き、歌を歌う。そういうのは日本人より、もしかしたら優れているかもしれない。そして、一九八〇年代は関係が遠くなつていきましたが、九〇年代から、また少しずつバングラデシュ人たちと交流するようになりました。シャーカーさんとお会いしたのも、確か二〇〇〇年頃でしたね。

シャーカー…そうです。

ペマ…二〇一五年、はじめてゆつくりバングラデシュを訪れました。この後ダッカのテロ事件があつたけれど、そのときは街も平静でしたよ。そこで独立運動を戦つた元軍人たちが集まつてきて、いろいろ話し合う機会がありました。

彼らが言つていたのは、本当は製品は日本のものを買いたいけれど、実際には中国の方が安い。そして、もっとバングラデシュのニーズに合つたものを売つてほしい。それから、バングラデシュに進出してきた日本企業が、日本では絶対行わないような劣悪な環境でバングラデシュ人を働かせている。

私はその話を聞いて、もちろんテロは悪いに決まつてはいるけれど、あのテロが行われたクラブは、バングラデシュの中でも特別階級の人しか集まらないような場所で、それがテロの対象になつたことも理解できるような気がしました。

シャーカー…確かにそういう面はあるのですが、同時に、バングラデシュは日本の支援に感謝している面もありますよね。

ペマ…大学や図書館に行けば、「これは日本の援助ででき上がつた」とちゃんと書いてあります。そこは中国とは違うところですね。

そしてバングラデシュの今後を考えるとき、やはり、基本的にはインドとの関係を密にすることが一番大切だと思うのですよ。両国の間には、実はいくつかの島をめぐつて領土問題も存在したんだけれど、二国間が話し合いで解決した。

インドが中心になつて、いわゆる南アジア圏のようなものを作つて中国の進出に対抗することが大事。南アジアは中華文明圏では全くなく、いいか悪いかは別にしてイギリスの植民地下にあつたから、インドを中心にして、お互いの国境を越えた仕事ができる。その意味で、バングラデシュとインドの歴史と関係がある意味、南アジア全体にいい影響を与えるような二国間の関係であつてほしい。

シャーカー…その南アジアの連帯に、できれば日本も参加してほしいですよね。

ペマ・安倍（元）首相が「自由で開かれたインド太平洋」という言葉を唱えたときには、これこそ私は中国に対抗できる価値観外交だと思ったんです。しかし、現在そのメッセージージは、いつの間にか弱くなってしまつてている。私はもう一度、日本と南アジアとの連帯を形づくるためにも、日本ももつと強くなつてほしいけれど、インドとバングラデシュが固い絆を作つて、そして南アジアに連帯を広げていくことも大切だと思う。

## 誇り高きベンガル人

ペマ…ところで、バングラデシユ人は、とても誇り高いでしょう。

シャーカー…それは、ベンガル出身の詩人タゴールがアジアではじめてノーベル文学賞を取つたことからも来ているし、そして何よりも、自分たちが犠牲を出しながらも独立を果たしたから、それが民族の誇りになつています。そして、ベンガル地域は、いろいろな民族が長い歴史の中でまじりあつて生きてきたから、文化的にもとても豊かになつていつた。

映画監督のサタジット・レイ（一九二二～九二。「大地のうた」など）もベンガルの出身です。レイの映画は日本の偉大な監督、黒澤明も評価していて、二人は交流もありました。それと、やはり日本と関係が深いバングラデシユ出身の人は、東京裁判で堂々と正論を述べたパル判事ですね。そのパル判事を日本に招請し、全国を回つて講演会を行つたのが下中弥三郎氏です。

ペマ…ここで間違えてはいけないのは、パル判事は日本の味方をしたんじゃないというこ

と。あくまで、法律家、国際法学者として、東條英機ら、いわゆる戦犯とされた人たちを罪に問うことができないと述べた。もしも戦争犯罪を言うのなら、ルーズベルトや原爆を落としたトルーマンも、中立条約を踏みにじり、また満洲の日本人を収容所に入れたりしたスターリンも、みんな裁判にかけなければ法的に公正ではない。

ただ一方で、これは誤解されるかもしれません、私は日本をアメリカが占領したことは、最悪の事態を避けるためには、まだよかつた点もあると思いました。それは、今回の天皇陛下の御代わりをテレビなどで見たときにも感じたのですが、万が一スターリンが日本を占領していたら、最悪の事態が訪れたかもしれない。

マッカーサーは昭和天皇と会見した時、陛下が命乞いをすると思っていた。あるいは、部下の責任にして自分は逃れようとすると思っていた。しかし昭和天皇は、「私の一身はどうなるか構わない。どうか国民が生活に困らぬよう、連合国の援助をお願いしたい」と述べられた（藤田尚徳『侍従長の回想』講談社学術文庫）。このような指導者は世界中を探してもなかなかいない。この御言葉と御姿がマッカーサーに感銘を与えた。でも、スターリンだつたらどうなつていたか。私はチベット人として、共産主義の恐

ろしさはよく知っていますから、テレビを見ていてそんなことを思いました。

そして、今後のバングラデシュのことですが、繰り返すけど、やはりバングラデシュはインドとの関係を強めたほうがいい。中国とでは価値観も性格も水と油です。そして、過去の歴史のつながりもない。そんな国同士がうまくいくはずがない。

そして、モハンマド・ユヌスが創設したグラミン銀行（貧しい人たちに低金利でお金を貸し、仕事をさせる）、ユヌス氏自身は今批判されてはいるけれど、あの発想自体は正しい。貧しい人たちに福祉ではなく、きちんと仕事をさせるための資金を出していく。そして、全国的に農業を活性化させることが大切です。まず、ITとかよりも、農業を国の基本に置く。たとえばドローンとかも、中国のように軍事ではなく、農業に応用できるような発想を生み出していく。

私の社会思想は、民主社会主義に一番近いんですよ。民主主義と、そして共産主義ではなく、個々人の自由な経済活動は認めるけど、同時に福祉や社会保障をきちんとしていく。極端な自己責任論で格差を正当化せず、企業があまりにも勝手にリストラすることを許さない。そういう社会を、日本も、バングラデシュも目指してほしい。

シャーカー・バングラデシュは、日本と同じ「海洋国家」の面があるんですよ。五つの大きな川が國中を走り、その川辺で文明が栄えた。そして、川の流れとそこから登る朝日、川に沈んでいく夕陽の美しさから、詩や音楽がたくさん生まれた。タゴールを生み出したのも、そういうバングラデシュの自然なんです。これは、自然を愛し、そこから歌や俳句が生まれた日本とも共通するものがあるんじゃないでしょうか。日本とバングラデシュは、もつとわかり合えるはずですよ。

ペマ・今、ミャンマーにおけるロヒンギヤ難民の問題がありますが、シャーカーさんはどの問題はどう考えていますか。

シャーカー・これは難しい問題なんです。時々、一方的にミャンマー政府が彼らを弾圧して追放しているかのような報道が目に付くけれど、そんな単純なことじゃない。彼らの中には、少数かもしれないけど、中東から来た、かなり過激なイスラムの影響を受けた人も交じっていて、実際に仏教徒を殺害した事件もあるんですよ。

ペマ・ミャンマー政府も、スーチー政権になつてから、ロヒンギヤに市民権を与えようとはしているんですね。民族としての自治権までは認められないけれど、ただ追い出して

いるだけではない。

シャーカー・この問題はイギリスの植民地時代にまでさかのぼる問題で、紅茶やゴム農園で働かせるために大量の移民労働者として連れてきて、その人たちが定住してしまったという面もある。大東亜戦争の時代には、日本軍が仏教徒を、イギリスがイスラムを、それぞれ応援してお互いが戦った歴史もある。簡単にどちらが被害者、加害者と分けられる問題ではない。

先ほど、一部で過激なイスラムの人がロヒンギヤ難民の中にいると言いましたが、バングラデシュの中にも過激なグループはいて、政教分離を原則とするバングラデシュの体制を否定している。もしもロヒンギヤ難民を受け入れれば、彼らの中の過激なグループが国内の同じようなグループと結びつく危険性もある。

私は最終的には、難民は氣の毒だから、バングラデシュが受け入れる選択肢もあると思います。しかし同時に、そのなかにある危険性をしつかり考え、準備し、時には選別する必要性もある。これは日本も同じではないでしょうか。移民を受け入れる方向に日本も動いているけれど、それは私も外国人ですから、それ 자체を反対するわけではありません

ません。しかし、彼らが日本の法律にきちんと従い、日本の歴史伝統、価値観を尊重して学ぼうとする姿勢があるかどうかは、受け入れる時点でよく見極め、また理解させないといけないと思います。

ペマ…私が日本社会の大きな利点だと思うのは、民族対立、宗教対立が比較的少ないこと。これは日本の発展の大きな要素なのですから、大事にしていくべきだと思いますね。

### 岡倉天心とタゴールが交流した意義

司会…アジアと日本の関係を考える上で、明治維新後、大東亜戦争までの日本がアジアに對して行つたさまざまな政治・外交について、お二人はアジア人の立場から、どのように考えておられるでしょうか。

シャーカー…まず、日本とインドの関係ということで言えば、最初の段階では、まず文化の交流から始まつたんです。イギリスがインドを植民地にした後、特にベンガルでは、信仰や伝統的価値の復興など、同時に社会改革と民族意識の覚醒が起きた。日本はアジア

で唯一、近代化を成し遂げていた独立国家だった。それまでは距離が遠かつたこともあって、あまり深い交流はなかつたインドと日本の間に、この時つながりが生まれ始めたのです。

やはりそこで忘れてはいけないのは岡倉天心。岡倉天心は、もちろん明治の大知識人として、西洋文明の価値や意義は充分理解していたのだけど、同時に、そのままねを日本やアジアがしても仕方がないとわかつていた。アジアにはアジアの偉大な文化と価値観があり、それは西洋に比べても全く劣るものではない。そのことを逆に天心は西洋に伝えようと思い、また、アジアのすべての民族がそのことを意識すべきだと思った。だからこそ天心はアジアに向けての著作『東洋の覺醒』も、日本とアジアの文明の神髄『茶の本』も、英語で書いて、世界に広めようとした。これは、タゴールや、インドの優れた知識人も基本的に同じ考えだつたんです。

一方、天心は日本国内で、日本の埋もれていた古代の仏像などの美術作品を再発見し評価すると同時に、日本画に新しい技術や発想を取り入れようとした。ここから、横山大観など、多くの画家が生まれてきたのですが、それは芸術や文化の活動であるとともに

に、深い意味で、政治的な運動もある。民族の伝統を回復することと、そのために西欧の技術や科学を取り入れること、それは文化の発展であるとともに、アジアが古い政治体制を革新し、同時に民族主義に目覚めて独立することにつながる。だからこそ、一九〇二年、岡倉天心がインドを訪れたことには、単に文化的交流ではなく、インドの知識人や独立運動家にとつて重大な意味合いがあつたのです。

タゴールと天心、天心とインドの関係は、本書で私の考えも含めて詳しく書きましたけれど、イギリスははつきりとタゴールと天心との連帯を阻止しようとしたし、また天心は、インドで積極的に独立運動家と交流した。その中にはタゴールの甥、シュレンドロナート・タゴールもいました。天心が『東洋の覺醒』を書き上げたのはインド滞在中だし、そこには、独立運動家たちとのいろいろな意見交換も反映しているはずですよ。そして一九〇三年『東洋の覺醒』が発表されたけど、そこには、西洋の植民地支配に対し、アジアの諸民族が連帯して立ち上がりという、はつきりした武装闘争の呼びかけがなされている。その意味で、日本とインドの交流は、最初から文化交流でもあり、また隠された政治的連帯でもあつたんです。

ベマ・ギャルボ：確かにタゴールの本の中に、「岡倉天心の書物に触れて、はじめてアジアという意識を持つようになった」という趣旨のことが書いてあつたように思います。いわゆる岡倉天心の有名な「アジアは一つ（*Asia Is One*）」という言葉が生まれるまで、アジアという意識は、実はアジア諸民族の中にはあまりなかつた。当時は、ヨーロッパとアメリカ、そしてアフリカ大陸のほかは、東洋（オリエント）という概念が、中東から東側を指すものでした。そこに、アジアという意識を確立したのは確かに岡倉天心が最初で、その根底には歐米の侵略に対し、文化面でも政治面でも、アジアの諸民族が連帯しなければならないという意識の目覚めがあつたのかもしれません。

シャーカー：その意味で、我妻和男先生のタゴール論はその通りなのですが、それ以外の他の日本のタゴール研究家のものを読むと、日本とタゴールとの関係を、あくまで文化面だけに限つて論じようとする傾向があるでしょう。政治に触れる場合でも、タゴールが日本の戦争に反対していたという発言だけを持つてきて、タゴールは日本に批判的だつたということを強調しようとする。

でも、これは歴史的な事実だけれど、インド独立の志士ラス・ビハリ・ボースは、タ

ゴールの親族という立場で日本に来たんですよ。ビハリ・ボースは自分自身のことはあまり語つていなければ、インドでは秘密の活動をしていて、その中には今の価値観で言えばテロ行為に近いものもあった。しかし、当時はほかに手段はなかつたし、ビハリ・ボースは安全圏で人に指示していたんじゃなく、自分自身最も危険なところで活動していく、そのため、イギリスの指名手配になつたんです。

それで、ビハリ・ボースは日本に拠点を作ろうとして、直接は何の関係もないんだけどタゴールの親族と偽つて、「タゴール来日の準備をするから」という名目で日本に来た。それをタゴール自身が知らなかつたはずはないし、何らかの協力はしているはずです。ビハリ・ボースが日本で再び逮捕されそうになつた時に、玄洋社の頭山満翁が支援した話は有名だけれど、タゴールは来日した時に翁と会見していて、その写真もある。そして、後にチャンドラ・ボースが日本に来て、インド国民軍を率いて戦うのも、このビハリ・ボースが先に日本にいて、いろいろな支援者を作つたり、日本での独立運動の公的な国際会議を開催したり、組織作りをしたからこそ、できたことです。

中国の革命家たちもそうだし、孫文はその代表でしょう。韓国の志士だつて日本に來

ていた。当時、アジアのほとんどの国が植民地になつていてるなか、日本しか頼りになる国はなかつたし、独立運動の拠点を外部に作るうとしたら、日本しか選択肢はなかつた。その時代の文化交流が、政治と全く無縁なんてことはあり得なかつたんです。

ペマ・東南アジアの志士たちも、日本に大変大きな期待をして、留学生などを通じて日本の近代化を学び、また、政治活動を行おうとしましたね。ただ、いま孫文の名前が出ましたけれど、孫文は正しい面と、間違つてている面があつたことは指摘しておきたいです。

孫文は偉大な革命家だつたとは思うけれど、彼の目的は、結局のところ、満洲人に支配された清朝を打倒して、もう一度中国人中心の国を作り、そして近代化を目指す、といふものだつたのじゃないかと思います。ですから孫文の最初の政治目標は打倒満洲王朝、打倒清帝国ですよ。そして「排満興漢」というスローガンも掲げた。満洲人に対しごくだけではなく、孫文の考への根底には、ほかのアジア人は中国人によつて支配されるべきだという「中華思想」がはつきり伺えます。これが、孫文の後継者を自称する毛沢東にも蒋介石にも引き継がれていて、現代の中国政府の霸権主義にもつながつています。

## 「アジア主義」は正しかつた

司会・ペマ先生は、先ほどシャーカーさんが触れた、日本がアジアに果たした役割という点はどう思われますか。

ペマ・シャーカーさんも言われたように、少なくとも明治維新によつて、日本はアジアでほとんど唯一、西欧の近代化を取り入れ、同時に西欧に対し自立しようとした国でした。西欧＝近代、と決めつけるべきではないかも知れなけれど、少なくとも一九世紀末から二〇世紀にかけて、西欧はアジアにとつて近代化の象徴だつた。その技術や成果を取り入れる点において、日本が他のアジア諸民族より先駆的で優れていたことは歴史的な事実で、そのことは日本人は誇つて当然だと思う。近代的な産業革命を日本は成し遂げて、軍事的にも西欧と対抗できるだけの力を持つことができた。

そして同時に、岡倉天心はもちろん、新渡戸稲造にせよ、内村鑑三にせよ、明治の知識人たちは、西洋の技術だけではなく、その信仰や哲学までも深く理解し、共感できるものは取り入れようとした。これが、日本を単なる西欧の技術だけを真似た国にして、

なかつたのだと思う。新渡戸稲造も内村鑑三もクリスチヤンになつたでしよう。しかし彼らは、同時に大和魂、日本の伝統精神を忘れなかつたし、それとキリスト教とを両立させようとして、『武士道』をはじめとするたくさんの著作を、これも英語で執筆した。このような姿勢が、アジアの人たちに、日本は西欧の真似ではなく、新しいアジア人の道を示そうとしている、という信頼感を与えたのだと思います。

明治維新後の日本国は、最初はまず、自分たちを西洋の侵略から守る、独立を守るというところから始まつたけれど、次第に、日本のことだけではなく、西洋に植民地化され、圧迫されているアジアの民衆を助けよう、そして、明治維新のような改革と独立を指向するアジアの志士たちと手をつないで、植民地を解放しようという思想や行動が生まれてきた。そして、特に民間の志士たちがこの思想を実践しようとし、それがアジア主義と呼ばれていつたわけです。

政治外交や戦争がすべて正しかったとは言わないけれど、少なくともこのアジア主義は、私は正しかったと思うし、今でも意味を持っていると確信しています。

シャーカー・新渡戸の『武士道』はインドでも翻訳されていますね。それと、とても素晴らしい女性で、タゴールが来日した時にも日本での講演に同行し、深い影響を受けた高良とみさんという人がいます。この方は婦人運動や平和運動で大きな業績を残した方ですが、彼女ももともとアメリカの大学で英語で論文を書いて博士号を取っている。

皆、日本人でありアジア人であることで、逆に堂々と西洋でも活躍したのですね。同時に西洋にも、目覚めた知識人の中には、西洋の限界を超えるものとして「ルック・インスト」、つまりアジアの文化に目を向けようという姿勢があつた。だからこそ、タゴールもノーベル文学賞を受賞して、たくさんの方々が彼の作品を評価しました。

## 渋沢栄一とタゴール

司会：明治の偉人としては、渋沢栄一が今度紙幣にもなり、大河ドラマでも放送が予定さ

れていますが、そのことについてはどう思われますか。

シャーカー・渋沢栄一は、先ほどペマ先生が言った、日本の近代化と産業革命の象徴のような方で、この人なくして日本の近代史は語れません。渋沢は企業を起こしただけではなく、あらゆる社会事業を行つた。でも、そういう近代化の象徴のような人が、同時にタゴールに共感し交流があつたというのも興味深いことです。タゴールは全部で五回日本を訪れていますが、そのうちの一九一六年、一九二四年、一九二九年、渋沢はいずれもタゴールと会い、歓迎会や晩餐会を共にしています。

日本とインドの親善を図るために、一九〇三年に日印協会が発足しますが、これを組織したのは、大隈重信、長岡護美、渋沢栄一で、それぞれ第一代から三代までの会長を務めました。タゴールを招待することに特に熱心だったのが渋沢で、協会は日本とインドとの貿易や経済協力を行いました。協会は大東亜戦争中インド独立運動を支持していましたということで戦後は一時的に活動禁止となります。一九四七年のインド独立後、活動を再開しました。こういう歴史や、渋沢とタゴールの人間関係とかは、今は日本人にも、インド人にもあまり知られていない。今度、渋沢栄一が紙幣になるということなら、

このような歴史も再評価しなければいけませんね。

ペマ・渋沢栄一については、もちろん近代化を成し遂げ、日本に資本主義や株式会社のシステムを作った人として再評価されるのもいいのだけど、もしも今の時点で渋沢を取り上げるのならば、今、渋沢が現代社会の資本主義を見たらどう思うだろうか、という視点を抜かしては絶対にいけない。今、資本主義は、私の視点ではかなり間違った方向、単に経済的な成功者、社会の勝者が、平気で弱者を貶めたり、自分たちだけで富を独占するようなことを正当化する方向に行ってしまっている。

渋沢栄一の思想では、経済を考える上で、国民の利益、共同体の利益、つまりコモン・インテレストという視点をいつも忘れないようにして、経済と、道徳や社会正義という概念を結びつけようとしたのに対し、今は、日本の資本主義が全く逆の価値観、「自分の会社が良ければいい」「自分自身が儲かればいい」というエゴイズムに結び付いてしまっている。

もし渋沢栄一の肖像を紙幣にするなら、そういう時代への反省という視点がなければいけないし、資本主義の正当化として渋沢を扱うのではなく、共同体の利益ということ

をもつと再考すべきだと思う。

お金を持つている人は自分の力で成功したのだから、その人たちからは税金をあまり取らないようにしよう、日本人の名前が世界の長者番付に載ることは無条件にいいことだ、そんな考えは、渋沢栄一が望んだものとは正反対のものです。そして、資本主義本来の在り方からしても、決して良い結果をもたらしません。

確かに、自分が働いた分だけ自分が潤う、というのはある程度必要だし、当たり前です。しかし、それは他人を犠牲にしてまで、また不幸にしてまで、自分が儲かればいいなどという姿勢とは違います。アジアという言葉を使えば、本来、アジアの伝統のなかには、他人を犠牲にしてまで自分が幸福になるという考えは間違っているという姿勢が、特に仏教のなかにはありますよ。

シャーカー・渋沢の偉かったのは、社会貢献をしたことです。これはインドのお金持ちもそうで、学校を建てたり、公共の建物を建てたり、そういう伝統は今もあるんですよ。ペマ・最近の成金的なインドの財閥は別ですが、インドの伝統的財閥には、儲かつたお金でお寺を建てるとか、学校を建てるとか、社会全体の利益を考える姿勢が確かにあります。

す。これは、私が子供だった時代ですが、一九六〇年代には、まだガンディーのお弟子さんたちがたくさんインドにおいて、彼らはいろいろなお金持ちや地主を回つて、土地を分けてもらい、それをさらに貧乏な人に与えていた。共産主義者がやるよう、暴力的に地主や金持ちから財産を奪い取るのではなくて、これが善行であり社会貢献だと説得して、貧しい人たちをお金持ちが救済するように導いていた。

ガンディーと一緒に独立運動をやつてきた人たちの多くは、独立後も、政府の要職に就くよりは、社会活動、社会運動をやる人が多かつたんです。だからこそ、国民から尊敬されたのですよ。ガンディー自身がそうでしょう。暗殺されたとき、彼は政治家でもなかつた。役人でもなかつたし、あえて言えば、すでに政治運動家ではなく、ある意味宗教的な存在だったかもしれない。社会的な地位など何もなくとも、国民は彼を尊敬していました。

### ガンディーとネルーが見たチャンドラ・ボース

ペマ…ただ、ここでガンディーのことに触れておくと、日本ではガンディーに対しても、一面的にとらえすぎているところがあります。ガンディーの非暴力主義を「平和主義」とか、あるいは「無抵抗主義」と誤解している人も多い。確かに、ガンディーも長い独立運動のなかで、その時々の政治情勢や、あるいは聞き手に応じて、多少言葉を変えたり選んだりすることはあつたし、特に欧米の平和主義者の世論を味方につけるために多少そのような言葉も述べたかもしれないけれど、その一部を捉えて誤解してはいけない。

ガンディーは非暴力ではあるけど、決して無抵抗ではない、正義のために闘う意志は徹底的に持っているのに、日本ではガンディーの平和主義だけが強調されて、ガンディーが不正に対し強く抵抗する闘士であつたことが無視されたり、軽んじられたりすることがあります。

「*Chandrabose*」がある意味、民族主義者だったことも充分理解されていません。

「*Gandhi*」ははつきりと、「*眞の民族主義者は、眞の国際主義者でなければならぬ*」という趣旨のことと語っています。この言葉の意味は、お互いの民族、お互いの国家が、対等平等の精

神に立つて、双方の文化や主権を認め合わなければならぬ、それがなければ眞の国際社会の平和は実現しないという意味です。ガンディーの言う平和とは、このような視点に立つたものなのです。

シャーカー：ガンディーの話が出たので、これはちょっと大切なことだと思うのですが、ガンディーにも、ネルーにもできなかつたことが、インドにおける、ヒンドゥー教とイスラム教の和解と團結なんですよ。それが結局インドとパキスタンの分離独立につながり、バングラデシュの歴史的悲劇をも生み出してしまつた。そして、この両宗教の和解と團結ができたのは、チャンドラ・ボースだけだつた。

もう一つ、ガンディーは偉大だけれど、やはり間違いもあつたんです。独立運動を中心だつたインド国民会議で選挙が行われたとき、チャンドラ・ボースの方針が多数の賛成を得て彼が勝つたのに、チャンドラ・ボースを議長にしなかつた。これは民主主義のルールからいっておかしい。しかも、チャンドラ・ボースの軍事的な行動も必要だとう意見を嫌つて彼を事实上、追放してしまつた。そして、チャンドラ・ボースは、これ以上運動の中にいても何もできないと思つて、インドを去ることになるんです。

ペマ…ただ、チャンドラ・ボースの指導力を評価して、彼に「ネタジ」（指導者）という称号を付けたのもガンディーですよ。ガンディーは、あくまでボースは、ネルーとともに独立運動を続けてほしいと考えていたのかもしれません。

シャーカー：ネルーとうまく妥協できれば、確かにチャンドラ・ボースはリーダーになれたのかもしれない。ガンディーがそれを望んでいたのは間違いないですね。しかし、それはボースの性格と運動方針からはできなかつた。ただ、ネルーはチャンドラ・ボースと決別してからは、一切チャンドラ・ボースのことを発言していないし、戦後も日した時も全く触れていないんです。それで、戦後はチャンドラ・ボースの業績や、ビハリ・ボースと彼を支えた日本のアジア主義者たち、たとえば頭山満翁のことなどは、インドにほとんど伝わらなくなつてしまつた。

ペマ…ただ、チャンドラ・ボースについては、インドにたくさん銅像が建てられていて、たぶんガンディーの銅像の次に多いと思いますよ。その意味では、国民の人気はとても高いんじゃないかな。今はどうかわからないけど、昔はインドでチャンドラ・ボースの写真が使われたカレンダーとかもあつて、それはとてもよく売れていたんですよ。

シャーカー・国民レベルでの人気はそうなんですけど、インド独立後のネルーの外交政策で、インド国民軍やボースの名前は、政治的な場、外交的な場ではほとんど出ることはなかつたんです。やつと自由に語られるようになつたのは、ネルーの死後ではないですか。西ベンガル州では左翼の力が強かつたこともあつて、チャンドラ・ボースのことを、東條英機の傀儡みたいに言つていた時期もありましたよ。

ベマ・西ベンガル州は、三〇数年間にわたつて共産党が強かつたから、ちょっと特殊な面もあると思います。ただ、シャーカーさんも言うように、チャンドラ・ボースのことも、また、東京裁判でただ一人正論を述べたパル判事のことも、独立後、ネルー政権のインドが、国として積極的に称賛するようなことは確かになかつた。その理由の一つはたぶん、イギリスに対する配慮があつたんじゃないかと思いますし、大東亜戦争後、日本を悪玉として描く歴史觀を連合国が打ち出してたから、国際社会に入らなければならぬインドは、多少発言を控えるような面があつたかもしれません。

しかし、インド独立運動の指導者たちは、手法は違つても、お互い切磋琢磨し、尊敬しあつていた面もあつたはずです。これは日本でも、今の政治家は違うけれど、かつて

は与野党ともに、それぞれの理想と正義を持つていて、たとえ価値觀は相容れなくとも信頼し合うような関係はありましたから。

これは知識人もそうで、左右、保守革新の立場を越えて、お互いのいいところ、学ぶべきところには敬意を表すような姿勢がかつてはあつた。今は世界全体が、だんだん人間的に小さくなつてているような気がします。

司会・ガンディーもボースもネルーも、それぞれ、何十年に一度出るか出ないかという政治家ですからね。

シャーカー・中国の孫文だって、現在の目から見ればいろいろ問題はあつても、あれだけの政治家は出ていないんですからね。それは中国の現状を見てみればよくわかる。

## 日印の文化交流がインド独立に結びついた

司会・日本軍がビルマで行つたインパール作戦、悲惨な餓死者を大量に出したことで、大失敗の作戦だつたように言われることが多いのですが、シャーカーさんはあの作戦をど

う思いますか。

シャーカー・これは断言しますが、インパール作戦がなければ、インドの独立はあり得ませんでした。もしくは、それははるかに先のことになつたでしょう。チャンドラー・ボースが、日本軍に捕虜になつて、印度兵から印度国民軍を編成し、印度を解放するために行動したこと、これがどれほど印度人の精神を目覚めさせたか。確かに、作戦自体は失敗に終わったのかもしれないし、多くの犠牲者が出てることは痛ましいことですが、戦後、この印度国民軍の精神が全印度に広がったために独立ができた、そのことは事実です。

大東亜戦争後、印度国民軍はイギリスによってインドで軍事裁判にかけられそうになつた。しかし、彼らはインドの独立のために戦つたのであって、なんら罪を犯したわけではない。インド国民軍を救え、印度国民軍の精神こそインドの意志だ、という運動がインド全土に沸き上がり、最後にはインドの軍隊、特に海軍が決起したんです。そして、だからこそ、チャンドラ・ボースの方針を批判していたネルーたちも、この軍事裁判に反対せざるを得なかつた。

ヒンドゥー教もイスラム教も、インドの多様な民族も、すべてを団結させたのは、インド国民軍を支持する運動がはじめてですよ。これで、イギリスはもうインドを去らざるを得なくなつた。これはアトリー首相も後にはつきり認めていることです。

そして、その背後には、日本が全世界を相手に四年間も戦い抜いたという歴史ですよ。確かに戦争には敗れたかもしれないけど、アジアの国が、欧米と戦い抜き、結局その植民地をほぼ解放した。そして、印度国民軍がこの日本とともに戦い、日本の力を借りたとはいえ、印度を印度人の力で独立させようと命を懸けた。そのことが、眞の独立の意志を自覚させたんです。

ペマ・大切なことは、この軍事裁判をインドが阻止したことです。そもそも軍事裁判といふのは、軍の規則を破つた兵士が軍法に準じて裁かれるべきものであつて、勝者が敗者を勝者の価値観で裁くものじやない。そして何よりも、インパール作戦当時、印度兵たちは、イギリスの統治するインドを護るために、イギリス軍として駆り出された。ですから、イギリスは日本と戦つたけれども、印度はある意味、日本とは戦っていないんです。そして、印度国民軍は、日本軍と協力はしたけれど、日本軍として戦つたん

じやない。あくまでボースを指導者として、インド独立を目指すインド人の軍隊として戦った。それが、なぜイギリスの軍事裁判で裁かれなければならないのか。こう考えた時、独立ということの意味、国家の意味というものがはつきり見えてくるんです。

司会…そういう意味では、戦術的な間違いは別として、インパール作戦がなければインドの独立はあり得なかつたということですね。

ペマ…それは間違いないです。

シャーカー…ここで忘れちゃいけないのは、インド国民軍を作り上げたのは、少なくともその基礎を作つたのはビハリ・ボース。彼が先にインド国民軍の組織化に動かなかつたら、チャンドラ・ボース一人ではできなかつた。

ペマ…ただ、ビハリ・ボースは、大衆に対する影響力はあまりなかつた。インド国民軍の基礎を作つても、そのあと、軍を維持し武装するための資金が大量に必要となる。それを、チャンドラ・ボースが、募金をアジア各地で呼びかけると、彼の演説に感動して、東南アジアにいるインド人たちが、お金持ちは多額の寄付を、また、個々人も、自分の持つている大切な装飾品、金の腕輪とかアクセサリーとかを惜しげもなく寄付した。これは

### チャンドラ・ボースのカリスマ性です。

ビハリ・ボースは知識も豊富だし、組織力も事務能力もあるけれど、そういうカリスマ性があまりなかつた。それで、チャンドラ・ボースを日本に呼んで、自分の後継者にしようとしたのです。でも、それはビハリ・ボースの人間としての偉さですよ。自分が基礎を作り、そしてそのあとは退いて、より次の運動に向いた人に譲っていくのだから。私の事務所には今でも、チャンドラ・ボースの演説のCDが置いてあるんです。彼の演説は、英語も素晴らしいし、ベンガル語はわからないけれど心が伝わつてくるような感動がある。私は今でも彼の演説に励まされ、勇気をもらっていますよ。

シャーカー…インドと日本の文化交流から始まつた関係が、ついに、日本軍とインド独立軍が共に戦つたことによるインドの独立をもたらした。ここに、二〇世紀のアジアの一つの奇跡的な歴史があると思います。日本は確かに、隣国の朝鮮半島や中国とのいろいろな深い歴史や関係もあるでしょう。しかし、このインドと日本の歴史もまた、きちんと日本やインド、バングラデシュの国民に教えられ、引き継がれていかなければなりません。